



# 六花 3

俳句雑誌りつか  
2018 (平成30年)  
cover design ichigo

山田六甲

道

寒卵茹で方を聞く母も亡し  
白息の身内濁りてゐたりけり  
山犬に滝の水柱の剥れ落つ  
沖の声能登金剛の桜貝  
千里浜は滅法痩せて栄螺焼く  
瀧川へ梯子架けある芹の水  
芹をつむ有馬芸妓の濡袂  
水漏れの音に春立ちゐたりけり  
杉原<sup>すい</sup>や橋<sup>はら</sup>ひともとの紙漉場  
城垣にお尻預て野蒜掘る

晒しゐる楮の縄を引き揚げぬ

寒造り杜氏の地元の今朝志慕里

（延川夫妻）

六代目市田なにがし瞳を焼く

底冷の轆轤に向ひ無心なり

黒足袋に泥乾きゐる陶師かな

城へ来て石のほとほと冴返る

家出せし猫も恋して寒からむ

一寸出て一寸戻りぬ寒の猫

暖かや難聴の妻誕生日 二・二六日

雪嶺抄

初 氷

笹村 政子

水底の草いきいきと初氷  
落葉踏む音のいつしか揃ひけり  
枯蔦に空の深さのありにけり  
枯蘆の丈の揃ひし汀かな  
落葉降る荷台に販ぐ弁当屋  
冬晴にかざす絵筆の穂先かな  
冬木立掃きたる空の青さかな  
泥鯉の諸手に余る池普請  
振り向かばふりむいてゐる冬帽子  
初雪や富士みに来よと子の便り

高華抄

冬銀河

佐津のぼる

枯れ切らぬ葉の風に鳴る蓮田かな  
時化つづく凍雲沖に滞り  
暮るるまで日差しを切に干大根  
木枯や老いの目尻の知らず濡れ  
もろもろの音消ゆる帰路冬銀河  
星空へ乾ける音の夜番の橋  
実千両祖父の名のある寄進札  
夜が寒しさむしと猫の膝に来る  
煤逃げの話相手に呼び出さる  
咳堪ふ演奏はいま終楽章

# 梟の鳴きゐる母の湯殿かな

藤生不二男

ふくろうのなきいははのゆどのかな ふじおふじお

浮寝鳥こころもとなき日の差せり  
四万十の河口まぢかに鴨群るる  
硝子戸に息の曇れる雪催  
冬晴の隈なき日差しありにけり  
晴るる日の笹子のこゑのやや高き  
茶の花をしるべとしたる墓一基  
梟の鳴きゐる母の湯殿かな  
ほどほどの熊手買ひたる酉の市

追憶の母恋俳句か。何歳の頃を想定した句か想像するしかないが、作者が多感に目覚める頃、薪によって湯を焚いていただろう。薪を足すように呼ばれた焚き口には母の湯使いの音が聞こえる。少年の作者は音だけ で母の入浴姿の想像を梟の鳴き声にふくらませたにちがいない。母に女性を意識し、淫らな想像を打ち消す贖罪として「湯殿」という言葉を幹旋したのであろうか。その時の印象は現在も強く脳裏に刻まれている。梟の声を聞けば、母の湯あみの音や湯の匂い、薪のけぶりまでが鮮明に蘇るのであ

雪卿集 せつけいしゅう

埋火

志方 章子

年の暮

永田万年青

赤きべべで飛び跳ねてゐる七五三

歩む度傷の疼ける寒さかな

埋火や父母ぬし頃の甦る

北風やタオルを首に作業員

天皇の馬車道とあり片時雨

成す事を一日延ばし年の暮

黄葉して嬰の手の平かと思ふ

忘年会新手の芸を見せらるる

白鯉の朱を際だたす冬日差

クリスマス妻も買ひ来しケーキかな

旅の途の時雨上がればまた時雨

年の瀬の裏道抜けて戻りけり

樹氷見し夢の世界にさ迷へる

筆先に友の貌あり賀状書く

ペーチカも昔語りとなりけり

見返しに良の一字や大晦日

浮寝鳥

藤生不二男

クリスマスツリー

出口 誠

浮寝鳥こころもとなき日の差せり

クリスマスツリーのそばに金の箱

四万十の河口まぢかに鴨群るる

クリスマスツリー彩る金と銀

硝子戸に息の曇れる雪催

コンビニの店員サンタのコスチューム

冬晴の隈なき日差しありにけり

仏壇に平和を祈るクリスマス

晴るる日の笹子のこゑのやや高き

電飾の青き光よクリスマス

茶の花をしるべとしたる墓一基

煙まで電飾の汽車クリスマス

梟の鳴きゐる母の湯殿かな

電飾の煙の動くクリスマス

ほどほどの熊手買ひたる酉の市

プレゼント早速遊ぶクリスマス

ひと塩

升田ヤス子

こんなところまで山茶花の散りきたる

ひと塩の浅漬潔かりけり

ひ弱なる子にと蜜柑の皮を干す

客蒲団干しぬ去年より重たかり

洗ひけり鴨居の固き古障子

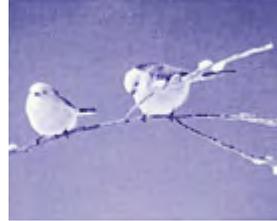
土手の鴨絵画のやうにうづくまる

空濠の底が見えぬて菌朶を刈る

爪立てて湯ぶねの柚子に目を射らる



# 雪樹集



紅葉谷

廣畑 育子

一本の松ありにけり紅葉谷  
裸木の空真白なる城下町  
たつぷりと焼板塀の実南天  
醤油蔵太き梁より冷え来たる  
冬立つや三和土に響く仕込唄  
稜線のなだらかとなるもみぢかな

竜の玉

住田千代子

松茸と共に届きぬ熊野筆  
枯れきれず時に揺れゐる芭蕉かな  
満ちみたる山茶花なるが淋しかり  
竜の玉貫ふ子の手のぬくみまで  
冬ざれの汀に溜まる光かな  
散りみたる銀杏の下に人待てり

柚子湯

谷口 一献

瘦身の柚子湯の熱り抱きしむる  
ぷかぷかと浅き夢見し柚子湯かな  
高級ワイン躊躇ひもなく聖夜かな  
散るといふ意志の強さや冬紅葉  
鴛鴦の寂しき時を思ひけり  
帆船の柱目立ちぬ寒の風

聖樹

平居 滯子

賀状彫る一筋ごとに木の匂ひ  
水槽の石も磨きて年用意  
柚子の香の残る浴槽洗ひけり  
忘年会果てホームより夜の海  
すつぽんの孵化降誕祭の奇蹟  
独り居のガラスの聖樹布聖樹

寒林

田尻 勝子

冬深し振り向けば日の去りゆける  
寒林の先にや赤き一軒家  
落葉踏む人のいつしか消えてをり  
秋の末古代陶器の破片かな  
银杏散る失せし黄金のネックレス  
水鳥を上下させぬる冬波濤

おでん鍋

溝渕 弘志

おでん鍋具沢山で蓋出来ず  
てつちりや太き白子を丸呑みす  
鯛焼きやあんこはみ出し火傷する  
ときめいて河豚の雑炊蓋開ける  
湯豆腐を言葉少なき夫婦食ふ  
牡丹鍋大皿に花は満開

戌年

延川五十昭

戌の字の躍りてゐたるお書初  
因幡かなくだけで白き冬怒濤  
焙煎の香り楽しむ大旦  
届きけり三尺近き睨み鯛  
包み解く葉付き蜜柑の香りかな  
鯛焼をほぼぼる指の白さかな

蓑虫 赤松有馬守破天龍正義

筆箱に蓑虫入れて戻りけり

筆ペンを懐に入れ桃青忌

手折らずに眺めてゐたる冬堇〇

達筆な蟹の値札や歳の市

今年こそ最後と決めて賀状書く

福分けの大根一本頂きぬ



# 蛍雪譚

弥生作品から

初氷

笹村 政子

(抜粋)

水底の草いきいきと初氷

初氷はその冬初めて張った水。ああ、冬が本格的にやつて来たなあという心象で氷は人事を詠むため点景として詠む場合を除いて吟行によつて詠まれるのが佳いという俳人もあり、戸外での寒さの中に詠めば感動も大きい。掲句も氷の張った水底を覗き込んだら水草を氷を通して見たらより青々と感じたのである。

冬銀河

佐津のぼる

枯れ切りぬ葉の風に鳴る蓮田かな

ほとんど枯れた中に一部の蓮の葉は淡く緑を残したのももある。その枯れきつてない風音を聞き分けている、俳人のするどい耳。耳が遠くなつても、心耳で聞いているからである。主宰は右の耳から入った声や音は左へ直通で抜けるが、作者は耳と耳との間に心という網を持つている。

べべちは子どもの着物の幼児

語で佳い名。子ども服飾メーカーBEBEBEというのもある。

べべを着せて貰った女兒が飛び跳ねて喜んでいる。が、着物を着ているのではらはらして見守っているのである。

三歳は女兒、五歳は男児、七歳は女兒、とここまで無事に育ちましたと御礼報告し、その後の成長や幸福を祈る。昔は子どもが育ちにくい時代背景もあつたので成長の節々に無事を祈つたのである。

赤きへべで飛び跳ねてゐる七五三

志方 章子

元気で飛び跳ねるのを神様もさぞお慶びだろう。女兒は次に十三参りがある。それでもう結婚できるのだつた。



善野 行

紅葉かつ散る都賀川の速さかな  
はるばると来し父祖の地の時雨かな  
紀の川は時雨あがりの雲の道  
冬ざるる野の碑の筆遣ひ  
装ひし山に松枯れ憂国忌

小林はじめ

短日の陰長くして屋敷越す  
乱されず平和な世なり万愚節  
たはむれもしない一日を万愚節  
生けるもの優しく包む春の雪  
終活のときを思ひて日記買ふ